詩

短編

ときどき

挿し絵

サークル名：さーかす / 著者：ASK.

詩、短編、ときどき挿し絵

はじめに

はじめに

この本はASK.が2005年から2014年にかけて不定期に書いていた詩日記などを編集してまとめたものです。ただし搭載順と制作順は関係ありません。

タイトルが思いつかなかったものは、そのままタイトル無しで採用しています。

少し長い自由詩と、少し短い短編小説の区分ができなかったので、どれが詩でどれが短編なのかは明記していません。

挿し絵は「Water C Pencil Lite」（巻末に記載あり）を使用して、フリーフィンガーで描いています。

詩、短編、ときどき挿し絵

流木

砂浜に打ち上げられた流木
波に揉まれ、岩に削られ、丸く、白くなった流木に
森に君臨していたごつごつとしたあの面影は、ない
どこから来たの、という問いに
木は答えず
まるで何年も前からそこにいたように
ただただ静かに横たわっていた

少し大きな波にさらわれて
いつの間にか木は波間に消えて、見えなくなった

夢だけを追いかけ続けている人は
強く光り輝いているけれど空っぽ
はだか電球のようにゆらゆら揺れいている
誰かにつつかれると割れてしまいそう

何かを諦めて一つ守っている人は
小さく不格好な重石
持ち上げにくいけど見た目よりもずっしりと重く
光の当たり方が変わると
ぎらりと鈍く光る

人生に無駄な時間はほとんどなくて
あるとすればそれは
両手に持ったアイスクリームのどちらから食べようか
悩んでいるあいだに
両手がべたべたになってしまった時くらい
それすら笑い話になると考えれば愛おしい
何でもやってみればいいのさ
大丈夫
世界はそれほどあなたを拒んでいない

「めっちゃにっきゅーやらかいねん」
私の幼少期最古の記憶がこの言葉
野良猫をさわっている少女も
顔を背けながらまんざらでもなさそうな野良猫も
少女のぷにぷにとした笑顔も、
この言葉以外は何ひとつ覚えていないが
私はまだあのにっきゅーを触ったことがない

『スイミー』の
目になった黒いスイミー以外の普通の魚が
もしももしも黒くなったら
その魚が目になっていただろうか
いや　誰も目になろうと思わなかったろうよ
彼らは必ず群衆の誰かであったはずだ
スイミーが黒かったから目になったのではなく
彼がスイミーであったから彼こそが目になったのだ

冷蔵庫の中で
卵は真剣に考えていた
そろそろ食べられるべきではないかと

全部全部全部全部全部って言うけど
全部は無理だよ
ひとつずつの可能性を
さがしている最中なんだから

プレゼント

どうやらこの世の中には
わたしより大きい大きい大きい人がいるらしい
その人が、
象とかくじらとか日本の地形とか
地球の丸さとか太陽系とか宇宙のことを調べて
それから自分より少しずつ小さい人に伝えていって
わたしに届けてくれるのだ

逆にわたしより小さい小さい小さい人もいるよ
その人が、
アリとかノミとか砂粒とか

細胞とか原子とか電子のことを目をこらして観察して
やっぱり自分より少しずつ大きい人に伝えていって
ついにわたしが知ることができる

そして
わたしはわたしの大きさでしか
ものごとを知ることができないから
わたしが知ったことを
誰かに伝えていくよ

ここではないどこかへと思って
動き続けていた
どこへ行っても　ここではなかった
周りのみんなよりも先に行きたかった
群れから抜け出したかった
でもみんな向いている方向がてんでばらばらだから
とある人より前に進んで
とある人より前に進んでいると
ぐるぐる回って
気が付くと結局みんなの所へ戻ってきていた
そのころみんなは　そこに根を張っていて

根無し草はひょろひょろと
浮き足立って　笑いながら泣いていた

「サンタさんをつかまえるんだ！」
娘が意気込んで編み物を始めた
どうやらばかでかいくつしたを作っているらしい
夜中にくつしたに入り込んだサンタさんが出てこれなくな
るくらい長いのを編むんだ
と叫んだ娘はすでに遠く
そのうちくつしたに埋もれて見えなくなった
そのときになってようやく思い出した
はるか昔にパパも
サンタクロースが落ちてこれないほどの
高い煙突を建てたこと

その罠にサンタクロースが引っかかって
今ちょうど煙突を昇りきって
落ち始めている折り返し地点だってこと
そのせいで世界中のパパが困っていること
地平線の彼方で豆粒になった娘を見つけて
携帯電話はまだしも糸電話くらいは持たせておくべきだっ
たなと
毛糸の海をかき分けた

いっぽ

がんばる
できる
ほめられる
がんばる
できない
しかられる
がんばる
できない
みすてられる

がんばる

なにか
わからない
がんばらない
なにも
いわれない
がんばれない
なぜか
わからない

がんばること
いちばんになること
みとめられること
じぶんと

たにんを
くべつすること
じぶんが
ここだって
さけぶこと

がんばれなくなって
たちどまって
いきてみて
たちどまると
いきつづけられないと
きがついて
いきることが

たいせつだと
きがついて

いきることを
がんばること
がんばることは
いきること

いきつづけることが
なによりだいじ
いきているじぶんを
うけとめること

それをだれかには
まかせられない

浮いているか
あるいは
沈んでいるか
あるいは
飛んでいるか
あるいは
漂っているか

モノクロ

まっしろなまちなみで
まっくろなひとたちが
あるきまわっている
うえをむいているのか
したをむいているのか
わからずに

僕の影が死んだ
長年付き合ってきたのに、車に轢かれてあっけなく。
真っ黒い血をまきちらして平面の世界から虚無の世界へ。
葬式を、僕の影の葬式をしてください！
そう叫ぶのだけれど　冷ややかで空っぽな視線たちは
僕の体をするするとすりぬけていく

目

僕は怯える
闇に光る二つの目に
僕は驚く
それが僕の目だと気付いて

何事にも心の底から関わることができない
笑っている僕のすぐそばで
その僕を笑う自分がいることを知っているから

僕は怯える
闇に光る二つの目に

僕は驚く
僕も闇にいることに気付いて

そととうち

耳を澄ます
遠くの喧騒が聞こえる
目を見開く
他人の嫌なところが見える

耳を塞ぐ
心臓の鼓動が響く
目を閉じる
風が頬を撫でた

感覚を研ぐ

周りを知った
感覚を殺す
自分を知った

ねむるまえ

おもいでは
とてもかなしいのでもってはゆけない

ひかりは
とてもまぶしいのでもってはゆけない

きみは
とてもとおいのでもってはゆけない

ぼくはぼくのものしかもってはゆけない
ぼくのうで

ぼくのあし
ぼくのめ
ぼくのみみ
ぼくのしんぞう
ぼくのほね

これらはみんなぼくのものだ
でもほんとうにぼくがつかっていたのか
いまとなってはわからない

うたは
とてもきれいなのでもってはゆけない

ぼくは
とてもわからないのでもってはゆけない

あやつる

誰かの一言で　私は笑った
誰かの一言で　私は喜んだ
誰かの一言で　私は怒った
誰かの一言で　私は泣いた

たった一言
それで世界は創られ　世界は崩れる
愛を紡ぐのも　死を誘うのも　同じ「言葉」
言葉の重みは
あるいは心に磐石を築き　あるいは背骨を砕く

ゼンマイ

人間ってやつは
うまくいったときは実力だと言い、
そうでなかったときは運が悪かったと言う
だから少しだけそれぞれを巻き戻してやることで
しぶとく成長する

罪を生きる

償うことさえできずに
今日も痛みを抱いて生きる

贖罪は自己満足に過ぎず
背の十字架は重くなるばかり

勝利も敗北もない
孤独なレースは永遠に続く

落陽の詩人

当たり前と信じ続けたものが
一瞬で消えた
そして気付く
当たり前かどうかなんて　本当は誰も知らないと

ありがとう

ほほえんでくれて　ありがとう
柔らかな光に　私はつつまれた

そこにいること
そんなにもそこに泰然としていることに
わたしは幸せを感じた

手をつないでくれて　ありがとう
刹那の永遠に　あなたの温もりを感じた

生まれてから一度も眠ったことのない子供
夜の闇よりも、瞼の裏の闇を怖がった

「坊や、眠たくないの？」
ぼくもう充分にお母さんのお腹の中で眠ったよ

子供は一人ぼっちだったあの時を思う
つい最近のあの哀しさを伝えたくて
どうしても思い出せなくて、泣いた
泣き続けてそして眠ることができなかった

今

「今なにしてるん？」
恋人にメールで聞かれて、僕は真剣に考えた

息してる　あたりまえ
勉強してる　振りだけじゃ
恋してる　くさすぎる

いろいろ考えたけど、なんかどれも違う
！そうか僕は今考えている
でも考えてないときなんてない　コギトエルゴスムだ
じゃあ生きてるっていうのは？

本当に？　本当に僕は生きてる？　実は死んでいたりしやしないかい？
僕が生きてる、あるいは死んでるって証拠はどこにもないんだな
だけどそうゆうむずかしいことは死んだときに考えればいいやって、僕は考えるのをやめた

「今なにしてるん？」
恋人にメールで聞かれて、僕はとりあえず答えた
「メールしてる」

或る少年

砂上の楼閣だな
少年はぼそりとつぶやいた
厖大な世界に氾濫する情報の中で
少年は確固たる意志を持って存在していた
彼には周囲がとてもぼやけて見えた
明瞭な輪郭を持っているのは己のみだと少年は思った
まるで砂上の楼閣だな
少年はもう一度自分に言い聞かせるようにつぶやいた
時にはその曖昧な泥濘に足をとられ　跪きそうになりながらも
少年は真実に向かって歩き続けた

ある日　世界が崩壊した
空が綺麗な朝　いとも呆気なく
原子までもが行き場を失くした中
少年は虚空を彷徨った
彼は急に孤独を感じた
あんなにもあやふやだったものが今はとても愛おしく感じられた
そして彼は一粒の涙を流した
一粒の涙は球体となって　辺りを漂った
その涙もまた　ふるさとから離れて孤独だった

消えてゆく！

きえるきえる　あかがきえる
きれいなゆうひが　きえてゆく
きえるきえる　みどりがきえる
きれいなもりが　きえてゆく
きえるきえる　あおがきえる
きれいなうみが　きえてゆく
きえるきえる　ぼくいろがきえる
ぼくがぼくが　きえてゆく

たんま

僕が「死んでしまえ！」と言ったら
そいつ本当に死にやがった
慌てて「あ、今のなし。うそうそ」と言ったけれど
死んだそいつは耳が聞こえない
ああ　どうしようどうしよう

うるさいやつら

五月蝿いんだよおまえ
消えてくれよ
黙ってろよてめえ
ウザイんだよ
何処か往ってろよきさま
用はねえんだよ

阿呆、間抜け、腑抜け、馬鹿野郎、餓鬼めが・・・・！

え？うるさい？俺？
ごめん

二律背反

自分を愛せない者が
他人を愛せる訳が無い

終わらない夜は無い
始まらない朝が無い様に

白が黒に堕ちる時
僕が感じる
小さな満足感
大きな罪悪感

頭痛が痛む子供の日記・第Ｐ12ページ目

今日の夕方午後六時ごろ
白い白馬から落馬して骨を骨折しました
すぐに病院に緊急入院です
その夜の晩ごはんは、ぼくの大好物の
にわとりの手羽先でした

夢の中で鬼のような悪魔があらわれて
僕の舌をひっこぬきました
僕は死ぬほど苦しんで死にました
悪夢のような夢でした

朝目が覚めると昼になっていました
冷たい雨が降っていたので
あの馬はどうしてるだろうと思って
思わずくしゃみしました

サイトーくんへ

同級生のサイトーくんに
中学の時にあげたサイン
元気してるかなあ

ある憂鬱な土曜の昼下がり

もう、歩けないよ
どうしてみんなはそんなに歩くのが速いの？
先に何かあるのを知ってるから？
僕には何も見えないや

僕は歩けなくなっちゃったけど
みんなはまだ歩き続けるんだね
僕はここでみんなの背中が小さくなって
点になって地平線に消えるまで
見守っているから

おもしろいことをおもしろいとおもわなくなっちゃって
わらいかたもわすれて
かなしいことをかなしいとおもわなくなっちゃって
なみだのながしかたもわすれて
それでもいたみはのこっているから
大丈夫　まだ僕は吐き気がするほど正気だ

魂の鼓動

君と僕が抱き合うと
温かい生命の調べが
透き通った音叉のように
柔らかく共鳴し合っていく

無銘

渾渾と湧き出る混沌
虚構の囚人が咽を潤し
指差しピエロが嘲笑する
偽りの笑顔は心臓を貫き
千切れた天使の羽は空知らぬ雪

恂恂と戦く秩序
忘却の旋律は哀しさを紡ぎ
原初の海で人魚が跳ね回る
快楽の獣は微笑みながら裏切り
潰えた牙は贖罪の証

乗車券を拝見いたします
車掌に言われて僕は切符を取り出した
ああ、こいつはいけませんね
車掌はそれをしげしげと眺めてから残念そうに言った
「でも、駅で買ったんですけど」
僕は平然と答えた
これは買った瞬間にしか使えないのです
万物は流転しますので、これはもう古い切符なのです
このことはヘラクレイトスも言っていることですので
間違いありません
「なるほど」

僕はうなずいた
「それならば、無賃乗車をした瞬間の僕と、今の僕は違うということになりますね」
そうなりますね
「では問題ないでしょう」
それもそうですね
車掌はにこりと笑って切符を僕に返して言った
あなたならこいつでどこまでもゆけますよ
実際そうだろう、と星降る夜空を窓越しに眺めながら僕は思った
この列車は走り続けるんだ　どこまでも

何か

何かが削れる音が聞こえる
何かが壊れる音が聞こえる
何かが砕ける音が聞こえる
何かを僕は後悔している

優しい世界を僕らのものに

僕は唄い続けるよ　いつか君が気付いてくれるから
僕は唄い続けるよ　いつか君が笑ってくれるから
僕は唄い続けるよ　いつか君が歌ってくれるから
僕は唄い続けるよ　いつか君が幸せになってくれるから

僕は唄い続けるよ　きっと君が気付いてくれるから
僕は唄い続けるよ　きっと君が笑ってくれるから
僕は唄い続けるよ　きっと君が歌ってくれるから
僕は唄い続けるよ　きっと君が幸せになってくれるから

だれもしらない

私は私？
いえいえ　私はあなたのあなた
あなたのあなたが私の私

あなたのあなたが私だから
私は私で私を見つけられない
あなたの私があなただから
あなたはあなたで私を知らない

だれかが　ぎゃーって　さけんでたから
だれだろうとおもって　まわりをみたら
みんなが　じぶんのほうをみていて
ぎゃーってさけんでるのは　じぶんでした

生と死は正反対のものだって言うけど
結局それは生から死を見て言っているだけなんだね
だれも死から生を見たことはないから
死んだこともない奴が死について語るなんておかしい

責任

「誰か」と言われたのに
それは自分だった
「誰か」と言ったのに
それはあなただった
あいまいなもので言葉を包んで投げつけるから
そんなにも床中にほこりが散らかっている

空色無形（そらいろむけい）

変わらない朝に目覚め
僕はいつもの道を往く
今　何を見ている？
今　何が聞こえる？

たくさんの人と
静まることのない空間
そしてそこに横たわる自分
突然消えてしまいたくなった

それでも次の朝は来た

ガラス越しに見上げる空
忘れていた夢の形
今はまだ届かないけど
いつかきっとたどりつける
青に浮かぶ形なき夢に

愛しいなんて心にもない言葉をがらんどうの身体から吐き
続ける僕を愛おしいと言う君がそんなにも愛おしいよ

僕は僕を押し込める
内に秘める殺戮の狂気を

ああ、本当に
僕を縛っているものは
わずかな良心と　ほんの少しの決まりだけさ
僕の皮膚の下では欲望が今にもはちきれそうに

満天の星の下
僕は月に吠えた

リズム

こどもが体を揺らしながら語らっただけで
言葉は歌となり、僕の耳を撫でて空に舞い上がった
歌はうれしそうに僕たちの真上をくるりとひとまわりして
から
更に高く飛んでいってすぐに見えなくなった
こどもはもう隣で眠っている
夢で歌を歌いながら

あのころ僕は　どうしようもなく不安定で
いまのいまにもどこかにぶつかって割れてしまいそうな
まるでまんまるのガラス玉
世界が傾けば、何の抵抗もなしに転がり出す
それでいつか世界の端から落ちちゃうんだろうと思ってた

だけど彼女は僕を止めた
たまたまぶつかった彼女は、粘土みたいに僕を包んだ
彼女は僕に合わせて姿を変えて、僕を世界にひっつけた
もう転がらない　彼女が支えてくれるから
僕は喜んだ　彼女も喜んだ

これは安定しているのか　僕が疑問に思うのは意外と早
かった
不安定だったとき　あんなにも僕は僕だけだったのに
今は僕が僕でないよう
そこで僕は彼女から離れてみた
ちょうど世界が傾いてたので
彼女の静止も虚しく　僕は転がり始めた
次の瞬間　僕は理解した
不安定である自分こそが自分で　不安定だから安定してい
たのだと
安定な自分は　自分じゃないから不安定なんだと

久々に感じる　転がっていく孤独　加速する焦燥
それらは折り重なっていつしか高揚に変わる
もう誰も僕を止められないんだ
だって僕は見つけたから

転がって転がって転がって転がって転がって転がって

ここだけの話、
はだかの王様は、本当ははだかじゃなかったんだよ
だって、はだかの王様を指差して
「王様ははだかだ！」なんて言う子供が
まともなわけがない
その子供だってはだかだったくせに

さーかす

ぴえろがバネのように跳ねました
バネのようにというのは半分嘘で
正確には体をバネにして跳ねました
体が本物のバネになったものですから
跳ねた倍だけさらに跳ね回ったのです
何度目かの跳躍で安普請のテントを突き抜けたぴえろは
何度目かの跳躍で低く垂れた夜空に頭をぶつけたので
金平糖が星屑のように
数少ない観客の
見上げていたこどもたちの口に
ひとつずつ

優しく降り注ぎました
それから空に穴をあけて宇宙に飛び出したのがぴえろで
その時の穴が満月ということになります
悲しくも道化師しかいないさーかすは
今もゆっくりとぴえろの帰りを待って
残されたこどもたちは
今もずっとひどく無邪気で

隠して隠して

誰にも盗られないように
誰にも盗られないものをしまって
誰も探しに来ないように
誰も探しに来ないものをしまって
誰にも触られないように
誰にも触られないものをしまって
そんなにも隠して
誰にも知られたくないかのように
隠したものに、私は隠れられて
一体何を隠したかったのだろう

腕の傷を見るたび

あの時の恐怖を思い出す
子供の私に空いた数ミリの穴は
致死的に心を蝕み
漠然とした不安に私は怯えた
今となってみては
あんなに大きな傷だったのに

マッチ売らない少女

雪の日にさ、マッチ売りの少女が居たから
買ってやろうと近づいたら、バスケットかごに何も入って
無いでやんの
「今どきマッチなんて売れないよ。あたしはここに居るこ
とが仕事なの」
生意気な白い息を吐きながら、あんたも同情で金を捨てに
来たんでしょう、って上目遣いで言うからぎくりとしてそ
の場を去った

夏に同じ場所に寄ってみると
彼女はそこでかき氷を売っていた

それでも彼女がマッチ売りの少女だとひと目でわかる、
したたかな少女のままだった

共存

きみが話す言葉を
私は身体でしか理解できない
雑踏の中でひときわ目立つ花弁の腕から
ぽとりぽとりと落とす赤い果実を目印に
私は誰かを装いながら何者かであろうとする

きみは虚像のヴィーナスで
私は一種類のフィルターしか持っていないから、
きみが待ち合わせに少し遅れてくること
きみの望みが叶えられないこと
別れ際にうつむいて　はにかむこと

そういった残酷さを私は知りたい
何でもないようなことを
何でもないように口にするきみが憎いから、
見知らぬ男に歯を見せて笑うこと
一日中ぼうっとして過ごすこと
会うたびに肌の香りが違うこと
そういった下品さを私は知りたい

例えばきみが夏に咲く花なら
私はその下で根と茎に絡まりながら
陽の影を糧に生きたい
例えばきみが秋に枯れる花なら
やはり私はきみを手折ろう

蒼

悲しみが蒼かったから
風船をつけて空にとばした
それは空に溶けて
何の物でもなくなったのに
ふと取り戻したくなって
そっと撃ち落としてみたけれど
それはまた別の悲しみだった
撃たれた悲しみは
地べたで泥をすすって
また姿を変えて振り返らずに空に帰っていった

だからもう
彫刻のように泣かせてよ
ありふれた冷たさでいいから
新しい火で心に氷を灯したい

のすたるじあ

あのころは　もう　僕
何だってできそうで
翼をくれたなら
空だって飛べたろうに

ああ　けど今は　だめなんだ
僕から抜け落ちた何かが
僕に付け加わった何かが
僕を地へと縛り付ける

そして僕は　あのころからちっとも変わっていない空を

濁った瞳で見つめて　こう言うんだ
「こんな穢い空なんか飛べやしない」

色

色は多弁であり
私はそれらに支配されている
彼らが語るのをやめたとき
私は彼らの境界を認識できずに、溺れてしまうだろう

私の消しゴム

何度、表面をキレイにしてもノートの文字が黒く引き伸ばされる
金太郎飴のように新しい部分を切り出してきてもまだ消えない
あせらない
さらっぴんの真っ白になるまで消しゴムを削ってから、落ち着いてノートにこすりつける
灰色の絵の具が広がる
この不良品が、と思いながら
また筆箱に押し込むのだった

でたらめ

適当が一番むずかしい
何をやっても何かに似ている
正しいことを知らないと、はずれを引くことができない
さぼろう楽しようとする道が一番のこころの茨であり
血まみれ息切れを隠しながら
粋に陽気に生きてゆく傾奇者の哀しさよ

竜巻

竜巻がやってきた
全てを喰らい尽くす竜巻だ
山草は根こそぎもぎとられ、山肌に爪痕が残された
野生動物は住処を捨てて、山の死を助長した
舞い上げられた岩、木、土、逃げ遅れた動物は
望まぬ形で山に没する

竜巻は山を降りて町にもやってきた
人々は戸や窓を閉め、部屋の片隅で、じっと、通り過ぎる
のを待っている
竜巻は畑や田を殺し、溜め池を泥の血で濁した

人々が夏の間に作った小さな木小屋は剥ぎ取られ、
限られた備蓄は空に散らされた
軋む倉庫の奥に詰められた家畜は怯え、いなないたが、その声が誰かに届くことはなかった

しかしながら、このような不利益を受けても誰ひとりとして竜巻と戦おうとはしなかった
ドン・キホーテのように竜巻に立ち向かう者はいなかった
ただあるがままを受け入れ、じっと、待っていた
竜巻は次の町へ去っていった

人々は晴れわたった空を見上げ、町中を片付けながら、
もう明日のことを考えていた

なんでもやっちゃうマン

なんでもやっちゃうマンの誕生！
先も後も考えず、なんでもやっちゃうもん
うんこもしっこも垂れ流してやるし、ごはんも自分で食べないもん
意味不明なことをわめきたてて、悲しくなくても泣いちゃうもん
気に食わないことは全部気に食わないから、顔を真っ赤にして怒ってやる
まだやりたいこともわからないのに、動かない手足を必死に動かして好きなようにやっちゃうし、
いきなり立ち上がってビックリさせたりしてやるもん

幼怒（ようど）

幼児の怒りは凄まじい
小さい全身で立ち向かい、生えたての白い牙を剥き出しに
してくる
もしそこに扱いやすい殺人兵器があったなら
大人は容赦なく惨殺されている
手加減の知らない殺意が
超新星のように爆発している
たとえ次の瞬間に怒りの原因を忘れて、
ケロリとした顔でお絵かきを始めようとも
たしかにそこに真剣な怒りがあったのである

たいせつなもの

無くしてしまったもの
失ってしまったもの
不慮に捨ててしまったもの
それらを嘆く必要はなかった
それらを手放してしまったのではなく、お互いに必要ではない時が来たのだ
そして真にたいせつなものは、また必要な時に姿かたちを変えて出会う

不思議の国の

この明るい重力空間で
誰が彼女に宇宙服を着せたのか
どうしようもなく不格好のまま
彼女は生きねばならぬ

彼女の残忍な本性は
メルヘンな現実に隠されしかし、
彼女のビーズの眼球は
大きいものを大きく、小さいものを小さく見つめていた

穴

往く往く地面に穴が空いている
ぽっかりとまあるい穴が空いている
そこかしらにちょうど人一人が入れるほどの穴がいくつも
空いている
みんなその穴を見えてか見えずしてか、するりと脇を素通
りしていく
私も同様に穴のふちからたっぷり離れて歩いている
普段意識しなくてもなぜかその穴に関わることは起きない
だが時々その穴から頭だけを出してこちらを恨めしそうに
見る人がいる
きっと穴に落ちてしまった人だ

そういう人たちを含めて穴は私の世界にひっそりと点在している
私の体液がひどく汚れてしまった時などその穴にわざと近付くことがある
慎重にゆっくりと近付いて首だけを伸ばして穴を上から覗いてみる
穴の中は真っ暗で何も見えないのに、ごおごおと何かの荒ぶ音が聞こえる、気がする
あまりに暗いので長く見ていると重力を失いそうになる
落ちてしまった人もこういうことを繰り返していつの間にか落ちたに違いない
それでも私はこの穴と生きずにはいられないのだ

ねむれないよるは
ベッドの下ではしゃいでいる心をふんづかまえて
紙の鎖で縛って金庫に放り込んでしまいなさい
そうすれば仔犬のように柔らかく寝ることができるだろう
しかし次の朝ほんの少しだけ早く起きることと
先生への遅刻の言い訳を忘れてはいけないよ
どうせキミは金庫の暗証番号を覚えていやしないのだろう
から

シャワー

愛が重いとき
乾いた心は痛くて
木洩れ陽の内に隠れてしまうのです
だからといって拒んでいるわけではないのですがとにかく
隠れてしまうのです
根腐れしないように

さびしい　さびしい
心がドーナツのよう
風がヒューヒュー吹き通る
でも私を通った風はドーナツ屋さんの香り
甘い香りを誰かに届けたい

朝から頭が重い。喉がイガイガする。なんだかすさまじい夢を見た気分だ。水を飲みに台所に立つ。いつも足に擦り寄ってくる飼い猫が居ない。水をがぶがぶ飲む。蛇口の下に頭を突っ込んで浴びるように飲む。びしょ濡れになった頭で猫を探すがやはり居ない。猫の名前を呼ぼうとしたが声がほとんど出てこない。かわりに歌が出た。自分のものではない歌だった。気味が悪くなったので早々と朝食をとることにする。しかし胃がムカついてまともなものを食べられそうもない。さしあたり野菜でも食べようと冷蔵庫の野菜室を乱暴に開けてムシャリムシャリと生のままでかじる。かじってかじってかじり続けて気が付くと冷蔵庫の

隣の観葉植物までかじってた。味は全くないが、パリパリとしたプラスチックみたいな食感が意外とイケるなと思った瞬間に、口からペロリと猫を吐き出した。飼い猫がまるっと口から飛び出した。おお、猫よ。そんなところに居たのか、と縮こまった背を撫でてやると、猫はケロリと鳥を吐き出した。あざやかな羽色をした文鳥で、こいつはお隣さんからおとといい逃げ出したとかいうやつらしいぞ、と思って鳥の首根っこを捕まえてやると、鳥はポロリと金魚を吐き出した。これはもうどこのどいつか分からない。こいつも何か吐き出すのかと見ていたが、ぴちぴちと床を跳ね回るだけで、それで終わりのようだった。なんとすさまじい夢だったのだろう。まさか金魚を飲み込んだ鳥を飲み込んだ猫を飲み込んだ自分だなんて。

ものはあるべきところにあるのがいい。猫はソファーに、鳥はとりあえず鳥かごに、金魚は金魚鉢に、そして自分はスーツに身を包んで、スッキリした腹をさすりながら、どうか人だけは飲み込みませんように、と祈ってから会社へと向かった。

チューしてよチューしてよってせがまれる
初めて会ったであろう仮面の少女に
顔の上半分を隠している仮面には穴がなく
薄い唇だけが彼女の表情で
チューしてよって言葉と裏腹に
凍った息を吐き出している
僕とじゃないでしょ、って言いながらそれがリビドーだと
分かっているからそっと口づけた
「下手くそ。さっきはそんなんじゃなかったのに」
夢から覚めてじっくりコトコトと悩んだ
別の仮面の彼女と会ったかもしれないことを

引き出しには夢がある
若者の夢がある
それは写真、文具、玩具、小銭、書類

引き出しには夢があった
若者の夢があった
未来の夢は過去の夢となった
過去の夢は今の宝物となった

引き出しの中の宝物は埃を被ることも色褪せることもない
なぜなら引き出しは時が止まっているから

しかし引き出しの真実を知らない人たちは誰もが心の奥底で、引き出しと一緒に化石になりたいと思っている
気が遠くなるほど先に、未来人によって化石標本に生活観の説明を付け加えられて博物館に飾られたいと願っている
しかしそうなることはない
なぜなら人は引き出しの中で死ぬことはないから

引き出しは時が止まっている
引き出しは引き出されることを待っている

君の手のひらは
太陽なんかよりもずっとちっぽけだけど
とてもとってもあたたかくて

君の微笑みは
モナリザのそれよりもずっとせつなだけど
とてもとってもやさしくて

君の歌声は
小鳥のさえずりよりもずっとかすかだけど
とてもとってもここちよくて

君の心は
ガラスの靴よりもずっともろいのだけど
とてもとってもやわらかくて

そして僕は涙を流す
熱い雫は君の白い胸を伝って
かわいらしいおへそにほんのちいさな池をつくった
いつか君の血と僕の涙が
混じりあえる日が来たらいいね

困ったちゃん

普通村の普通の家の普通の夫婦に困ったちゃんが生まれました。この子ときたら、親が手の離せない時に泣き叫び、真夜中にしかミルクを欲しがりませんでした。周りで見ていた人々は苦笑いしながら言いました。「なんともまあ、困ったちゃんだねえ」しかしそこは赤ん坊。両親は初めての子供なんてこんなもんだと、精一杯育てました。

やがて子供は成長し、普通の学校へあがりました。そこでもやはり困ったちゃんで、自分だけの世界で生きていました。つまり困ったちゃんが世界の中心で、その他大勢はオブジェだったのです。好きなことは好き、嫌いなことは嫌い、やりたいことはやる、やりたくないことはやらない。

欲望の赴くままに生きる困ったちゃんを、大人たちは矯正しようとしましたが、困ったちゃんはまっすぐ、まっすぐにそのままでいました。その頃からその子を本名で呼ぶ人はいなくなり、「困ったちゃん」とあだ名で呼ぶようになりました。その数年後成人して社会に出てからも、困ったちゃんは自由気ままに生活しておりました。周りの人間は困らされながらも困ったちゃんの世話をしていました。

ところでこの困ったちゃん、当の本人はまったく困っておらず、また他人を困らせている気持ちもなく、したがって、困ったちゃんと呼ばれているのが自分だとすら分かっていなかったのです。困ったちゃんは、その悪魔でもなく、天使でもなく、普通の瞳で、今だけを見つめて生きておりました。

ある朝、困ったちゃんはベッドから起きてきませんでした。原因不明に夜中のうちにぽっくりと死んでいたのです。それでも誰ひとり悲しむ人はいませんでした。ある者は、せいせいしたと声に出して言い、ある者は、手を叩いて喜びました。既に年老いていた両親もホッと胸を撫で下ろしました。みんなは、生前にも言っていたであろう悪口をことさらに言い立てました。そこには、困ったちゃんに困らされたことのない無関係な人も大勢おりましたが、彼らもやはり、困らされたような経験をまるで懐かしむように語り紡いだのです。

これは普通村で起きた普通のお話です。

さんかくとしかくとまる

しかくとまるよりとんがっているさんかく
さんかくとまるよりかくばっているしかく
さんかくとしかくよりころがっているまる
さんかくとしかくとまるになりたいさんかくとしかくとまる

待ってたよ

遠くから遠くから、やってくるのを待ってたよ
幸せを迎え入れる家を建てて
幸せと出会う正装をして
幸せを抱きしめる筋肉をつけて
幸せと会話する知識を蓄えて
幸せを掬い上げる器を作って
幸せと笑う笑顔を携えて
一緒に生きる命となって
遠くから遠くから、やってくるのをずっと待ってたよ
いらっしゃいませ、ありがとう

詩、短編、ときどき挿し絵

あとがき

あとがき

この本を制作するにあたって、一番困難だったことは「10年間自分のためだけに書いてきた文章の内容を、どうやって他人に伝えようか」ということでした。何か言いたいことがあって紙とペンを手にとった初心に戻って、何を吐露するために詩という手段を選択したのかを思い出しながら、編集を加えました。いわゆる耽溺詩、陶酔詩、言葉遊びにならないように、自分の気持ちを素直に表現し、そこから無駄な肉を削っていく作業は、非常に苦痛で、新鮮で、楽しい作業でした。

最近になって文学フリマというものの存在を知り、人生で初めての締切と編集作業に追われながら、新作を書き足

しました。今までの自由な落書き日記と、将来の他人の目を気にしながら書く文章とでは、明らかに書き手の心境が異なり、どうしても長々と全部を書くことで他人に完全なものを伝えようとしてしまいがちでした。そこでふと思いついたのは「書かないで伝えるためにはどうするか」ということでした。この思いつきに整理をつけるために、私はこれからも何か日本語を書き続けられるという希望を抱きました。

この本を手にとって見て下さった方々が、何か一つでも感じとってくれれば、私にはこの上のない幸いです。

ASK

サークル名:さーかす

著者:ASK.

Twitter:@ask1207asuka

HP:http://com.nicovideo.jp/community/co1959060

使用APP:
https://itunes.apple.com/us/app/water-color-pencil-lite/id795508485

発行日:2014年09月06日